

## 龍南の思ひ出：追懷

著者	大内，兵衛
雑誌名	龍南
巻	2 0 0
ページ	7 7 - 7 8
発行年	1926-12-25
その他の言語のタイトル	龍南の思い出：追懷
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/8909">http://hdl.handle.net/2298/8909</a>

# 龍南の思ひ出

大 内 兵 衛

熊本を去つてからもう彼れこれ二十年になる。實際龍南の自然と人生とにも世のそれと同じやうな變化があつたであらうそれが無いと考へ得る理由は更でない。

けれども、私にとつては、あの白い門赤い煉瓦黄色い銀杏樹、青松原、皆あのまゝであるやうに思へてならない。そして白い三本線の丸帽の若い人々がやつぱり當時の吾々と同じやうなことを想ひつゝ、歌ひつゝ語りつゝ歩いてゐるやうに思へてならない。それは必ずしも甘い思ひ出ばかりではない。けれども、この思ひ出には詩がある、熱がある。それだからなつかしい。

しかし、何と云つても一番なつかしい思ひ出は、月見草の亂れさいた武夫原に親しい友と語つた心持だ。そのときはこの僕でさへ、高鳴る血潮を吾が胸にきいたのであつた。そのときは、この僕でさへ理想に對するあこがれを吾が涙に託したのであつた。月は團々として脊の高い褪紅色の兵營のやうな寄宿舎の屋根にすんでゐた。草原の白露は一面にその光を吸ふてゐた。

その武夫原について次のやうなことがあつた。

私共が入學して間もないことであつた或日上級生の人々から全校生徒武夫原に集まれと達せられた。私共はそこへ集まつた。誰かが立ち上つたと見ると教頭排斥の大演説が始められた。一人か終るとまた一人が立つた。そして全く恐るべき程の熱辯がつゞいた。そして全校の生徒は熱狂して校長問責、教頭排斥の動議が成立した。之はまことにすさまじい勢であつた。所謂「栗野事件」と云ふもののである。

この事件は吾々の時代の全生活を色々に支配した。それをこゝに語ることは出來ぬが吾々の時代の五高卒業生の「五高會」で

龍南の思ひ出（大内）

—（大）—

は毎年この話か出ぬことはない。そしていろいろの英雄物語裏切物語がくり返さるゝのである。

今年、都下の新聞が當時排斥された教頭がまた或學校で排斥されてゐるといふことをやかましく傳へた。ちようどその當時又吾々の五高會が東京に開かれた。それは吾々の時代の卒業生の一人が法學博士になつたと云ふ祝賀をも兼ねてゐた。その祝賀された人こそ誰あらう、當時この問題の中心人物として「諸君立とうではありませんか？」と云ふ名演説を以て全校を壓した人であつた。私はこの會に出席して、當時の英雄達の話をきゝつゝ龍南の山姿を考へて見た。私にはそれが依然として當時の如くであらうとより外考へ得られなかつた。

—（大正二五、一一、五）—